



事例

愛知淑徳大学

共学化を契機に 新しい理念で改革を推進

愛知淑徳学園は、1905年、愛知で最初的女子高等学校である愛知淑徳女学校として開設されたのが始まりで、1961年には愛知淑徳短期大学、1975年には愛知淑徳大学を創立して、中学から大学までの女子教育を担ってきた。大学創立20周年の1995年、大学が「様々な価値観を交換し合うことによって新しい価値観を生み出す場」となることを期待し、男女共学をスタートし、その後も総合大学としての発展を続けている。

1995年の共学化から14年がたち、「進学ブランド力調査2009」で東海地区の男子の志願者ランキングが昨年55位から今年22位へと大きく順位を上げた。また、全体の志願度も14位から13位と国公立志向の強い東海地区で順位を上げた。こうした背景を探るため、共学化から現在に至るまでの、取り組みと今後の方向性について、理事長・学長の小林素文先生にお話を伺った。

共学化—変革の契機

愛知淑徳大学の歴史を振り返ると(図表1)、明らかに1995年あたりを境に変革に弾みがついたように見える。そこで、まずはこの時に行われた男女共学化の経緯から見ていこう。

1995年の大学創立20周年を前に、2年ほど前から今後の大学の方向性について検討を始めた。当時はどの大学でも、国際化、情報化、生涯学習化への対応に関心があり、愛知淑徳大学でもこうした方向での改革を模索して

いた。検討していくなかで、「国際交流や生涯学習は多様な価値観のふれあいが目的のはずだ。これを進める際に女性しか受け入れられないのもおかしい」とこれまで行ってきた女子教育とのバランスの悪さが課題になった。こうしたなかで大学の男女共学化というアイデアが自然に出てきたし、実際に1989年に開設した大学院では当初から、年齢、性別、国籍を問わずに学生を受け入れていたし、1992年に設置した留学生別科でも男女共学を実施していた。

当時は文学部のみで規模も小さかったため、学長から1993年1月の教授会で共学化について提案し、1-2カ月は相当数の教授会や会議を開催し、徹底して議論を行った。その年の3月の教授会で賛否をとったところ、反対意見は出なかったことから、男女共学化に向けて準備を進めていくことになった。同窓会からは「独自性がなくなる」と心配する声もあり、手紙もたく



小林素文 学長

さん寄せられたが、理事長自身が自筆ですべて返事を書いて、理解を求めた。学生に「学長から大切な話がある」と掲示した翌日、予期せず、共学化のニュースが地元紙の一面に取り上げられたが、予定どおり、全学説明会を行い、時間制限を設けることなく説明し、質疑応答を丁寧に行い理解を求めた。

共学化のニュースが流れた時には学生確保のためと書かれたが、東海地区の女子御三家の1校であり、当時の志願者状況も悪くなかったという。共学化は単なる学生獲得という目的でなく、大学の目指すべき方向性が明確になった点に大きな意味があった。共学化に向けて、UI(ユニバーシティ・アイデンティティ)委員会とその下部委員会をいくつか作り、全教職員が参加して検討したが、この下部組織として、理念検討委員会が設置された。教授会に男女共学化を提案した際に、「改革の方向性はよいが、スローガンがない」という意見を出した若手の教員らを中心に構成され、この委員会で、「違いを共に生きる」という理念が作られ、全学的にも承認した。「今になって振り返ってみても、今後の方向性を端的に示すすばらしいスローガンを作ってもらったと思う」と学長も述べていたが、創設者の建学の理念「10年先、20年先に役立つ人材の育成」を基礎に、時代や社会の動向を見据えた新たな教育理念を掲げたことがその後の大学に発展に大きく寄与している。

共学化と同時に、現代社会学部を創設した。将来的に工学、理系教育にも広がるような素地を作ろうと、地域、産業、メディア、国際社会など多岐にわたる視点か

図表1 年表(学部関連のみ)

1975年	大学創設 文学部2学科でスタート	1学部体制
1995年	大学創立20周年 男女共学化 現代社会学部の開設	2学部体制
2000年	コミュニケーション学部の開設 文化創造学部の開設	4学部体制
2004年	ビジネス学部の開設 医療福祉学部の開設	6学部体制
2005年	学園創立100周年	
2007年	文学部教育学科の開設	8学部体制
2010年	学部の大幅再編	

ら現代社会にアプローチする学際的な学部として作った。特に都市環境デザインコースでは、工学部建築学科と同等のカリキュラムが組み入れられ、注目を集めた。

相次ぐ学部設置へ

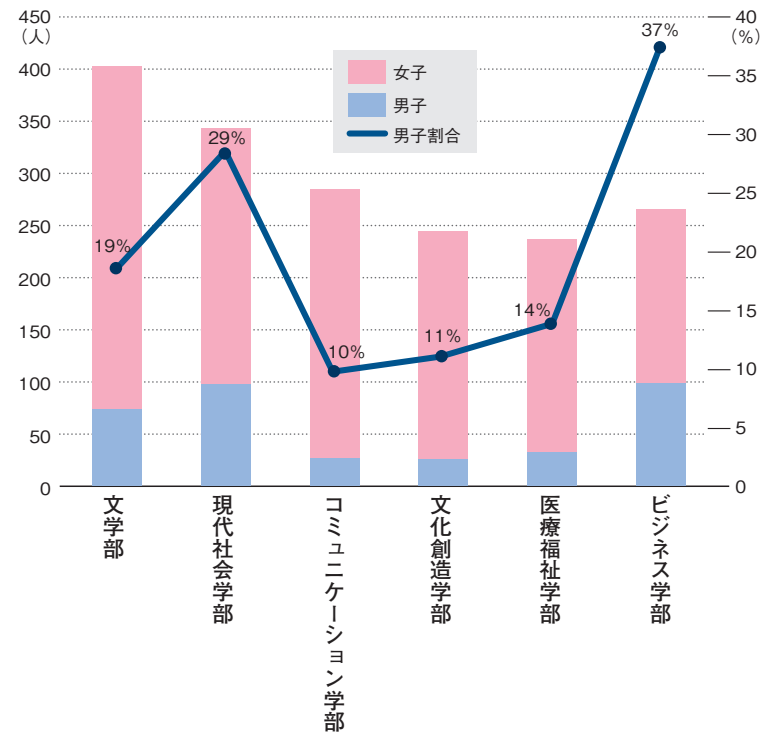
これを契機に、その後も学部設置が相次いだ。2000年には新たに2学部を設置した。この年に募集停止した短期大学の学科を基礎に改組し、文化創造学部を、臨時定員増の一部恒常化が認められ、文学部の再編を検討するなかで、コミュニケーション学科を分離し、コミュニケーション学部を立ち上げた。

また、学園創立100周年に向けて、星が丘キャンパスの整備とともに、さらに2学部を新設した。ひとつは医療福祉学部である。「違いを共に生きる」という理念のもと、男女だけでなく、国籍の違いをこえて外国人留学生や、年齢や世代の異なる社会人を受け入れてきたが、新たに健常者と障害者が共に生きるために何ができるのかを考えて作ったのがこの学部だ。また、もうひとつのビジネス学部は物造りの集積地である地元愛知県の特長だけでなく、国際交流の観点からも創設した。アジアからの国際交流を進めるなかで、彼らの要望が語学系だけではなく、ビジネス分野への期待が大きいことを実感したからだという。

キャンパスの雰囲気も変わる

1995年から10年ほどの間に、男女共学化、新たに5学部を設置など、大きく変化してきた。学部学生数も1995年には3435名であったが、2009年5月には7507名と2倍以上になった。共学化のせいなのか、社会の流れなのか、大学の風土や雰囲気が変わってきたという。女子大学の時は、育ちの良い女子学生が入学し、教員と学生が誕生日会をするなど、親密なコミュニティという雰囲気で女子大学の良さがあった。昔と比べれば教職員と学生との関係はドライになってきたように感じるが、女子大時代には活発でなかったクラブ活動が盛んになったり、大学祭が盛り上がり、雰囲気が明るくなり、活気も出てきたという。

図表2 現在の学部別男女比



これは自然な形で男子学生を受け入れてきたこととも関係しているのではと学長は述べる。共学化後、男子推薦枠を設けるなどの意見もあったが、結局は導入しなかった。無理やり男子学生を優先的に入学させても意味がないし、入試で差別するのは理念にも反するためだ。図表2を見ると、現代社会学部やビジネス学部で、男子学生の割合が高いが、それを意識して学部を作ったわけでもないし、今後もそういうことは考えないという。入学者数に占める男子学生の割合を見ても、1995年に15.7%、2009年に20.3%であり、それほど目立った増加とは言えない。

スピーディーな意思決定と実行

こうした相次ぐ学部の設置はどのように行われてきたのか。愛知淑徳大学では、中期計画などは策定していない。「学部を作るのは時間がかかるため、方向性を決めて申請していても3-4年はたってしまうし、10年先がどうなるかはわからない。だから、その時々々の状況を見ながら判断してきた」し、新しい学部を作る時も、既存の学部学科を見ながら、「伸びてきたものを伸

ばす」という方針で行ってきたという。

こうした学部設置などを最終的に意思決定する組織は、「大学協議会」である。これは1992年から置かれており、当初のメンバーは学長、副学長、研究科長、学部長、学生部長、事務局長であったが、1995年から新たに図書館長、国際部長、各学部選出の委員を加えた。大学運営にかかわる全学的な重要事項を学長が主催で審議する最高意思決定機関として機能している。この大学協議会に議題を調整する機関として、「総合企画委員会」がある。学長、副学長や学部長が参加し、アイデアを出す組織であり、ここで新しい学部、入試、人事のことなどの教学事項を徹底的に議論できることがとても重要なのだという。学長や副学長がアイデアを現場の教職員に投げかけて、どう反応するかのキャッチボールをしながら進めてきたし、

このキャッチボールを嫌がらずに何度でもやることを心がけてきたという。こうした小回りの利いた進め方が可能だったのは、規模も小さく、歴史が浅い学部が多かったことが関係しているのではないかと学長は分析する。

新しい学部を設置したりすることは、教学事項であると同時に、新たな投資が必要な経営事項であり、このあたりの調整をどのように行うのかを尋ねたところ、規模も小さく、学長と理事長が兼任しているので、個人で調整し、経営的な観点から計算しつつ、進めてきたという。小林学長は、創業者の孫にあたり、1989年から学長、1991年から理事長も務めている。学内のリーダーが明確な方向性を示し、比較的長期間、安定してトップを務めることによってうまく機能してきたケースといえるだろう。この背景には当然のことながら、学長・理事長が学内の意見を聞きながら進めてきた過去の選択が確実に成果を上げているという条件が必要になるし、明文化した計画は作っていないが、計画以上に重要な「あるべき姿を模索し続け、厳しい自己点検評価」を行ってきたことも重要な点だ。「伸びてきたものを伸ばす」戦略でスピーディーに学部を相次いで設置

するのは、規模の大小にかかわらず、どの大学でもできることではない。

ただ、小林学長自身も1995年当時、入学定員が1900名近くにまで拡大することは考えていなかったという。理事長として「経営的には入学定員を1000名くらいにしたい」と思っていたが、それを受けて学長として「これをしよう」とは特に考えていなかったという。社会の変化や学内での議論を重ねながら、結果的にこれほど大きく変化し、大学として地域でそれなりのアイデンティティを確立してきたのではないかと振り返る。

2010年には大幅な学部改編

来年度にはさらに大幅な学部改組を予定しており、収容定員も増加させる。現在からどのように変化する

のかを図表3に示した。今年度の志願者増はこの変化への期待と解釈できる。以下、詳しく見てみよう。

(1) 学部アイデンティティを明確化

これまでの6学部を8学部にも再編し、より学部のアイデンティティを明確に打ち出した。例えば、文学部の英文学科や国文学科は、これまで多くの中学高校の教員を世に出し高い評価を受けてきたが、これに教育学科を加えた3学科とコンパクトにし、中高教員免許と小学校教員免許を併せて取得できる体制を作り、教員養成のためのカリキュラムを充実させた点に特徴がある。医療福祉学部の医療貢献学科と福祉貢献学科は、医療福祉といった特定分野に特化することなく、より幅広く医療と福祉それぞれの分野に貢献すべく、学部として独立させアイデンティティを明確化させた。

(2) 2つのキャンパスの位置づけも明確に

各学部間のアイデンティティを明確化するだけでな

図表3 学部再編

現在	2010年度
文学部 国文学科 文学部 英文学科 文学部 教育学科	文学部 国文学科 100名 英文学科 100名 教育学科 100名
文学部 図書館情報学科	人間情報学部 人間情報学科 200名
コミュニケーション学部 コミュニケーション心理学科	心理学部 心理学科 180名
現代社会学部 メディアプロデュースコース 現代社会学部 都市環境デザインコース 文化創造学部 表現文化専攻	メディアプロデュース学部 メディアプロデュース学科 300名
医療福祉学部 医療貢献学科 言語聴覚学専攻 医療福祉学部 医療貢献学科 視覚科学専攻	健康医療科学部 医療貢献学科 80名 スポーツ・健康医科学科 120名
医療福祉学部 福祉貢献学科	福祉貢献学部 福祉貢献学科 120名
現代社会学部 フィールドスタディコース コミュニケーション学部 言語コミュニケーション学科 文化創造学部 多元文化専攻	交流文化学部 交流文化学科 12の専攻プログラム 340名
ビジネス学部 ビジネス学科	ビジネス学部 ビジネス学科 8つの専門モジュール科目 3つの実践モジュール科目 230名

(注) 2010年度の数値は収容定員。

長久手キャンパス

星が丘キャンパス

く、学部同士の相互刺激という観点から、長久手キャンパスと星が丘キャンパス(もともとは短期大学のキャンパス)という2つのキャンパスの位置づけも明確化した。

そこで、専門性を意識した学部が多い長久手キャンパスに対して、星が丘キャンパスは教養学部的な学部を集めた。交流文化学部とビジネス学部は互いに刺激し、密接に関係した学部と位置づけ、それぞれのカリキュラムを自由に履修できる。この2つの学部は、入学時に専攻を決めず、学生が自由に動き回り、視野を広げることを目指しており、この学びのスタイルを「星が丘モデル」と名づけた。

(3) 全学共通教育もさらに強化

これらに加えて、全学共通教育も強化する。愛知淑徳大学の教育では「役立つものと変わらないもの」の両方を大切にしている。「役立つもの」は、語学やコンピュータ教育で、例えば、TOEIC®テストを評価基準として到達度に応じた英語教育を行っている。来年度からは正しい日本語で表現する力を身につけさせる「日本語表現科目」を必修科目として新たに設置した。「変わらないもの」は、人間性や教養、時代を見通す能力のことであり、ゼミなどを通じて育成しているが、来年度からはこれに加えて、大学の理念や自分のあるべき姿を見つめる「違いを共に生きる」「ライフデザイン」を必修科目として導入し、オムニバス形式で幅広い分野の講師から学ばせ、学生に刺激を与える。

体験型の科目もより積極的にとらえて、大学のアイデンティティとして発展させていきたいという。現在も多くが学生が「コミュニティ・サービスラーニング」などの科目を受講し、学内のコミュニティコラボレーションセンター(CCC)を通じて、ボランティアや地域・市民活動に参加している。環境問題を考えるワークショップの企画・実践、企業のCSR活動の企画立案への参加、外国人の子どもたちと映像作品を制作し、メディアで発信など、実践によるアクティブ・ラーニングを通じて、問題や課題を見据え、発見する能力の育成をねらいとしている。数年前から、特に文系の学生は一生懸命に学ぼうと入ってきたにもかかわらず、はっきりとした目標意識をもって入学するケースが少ないた

めに、入学後に居場所をなくすケースが多かった。こうした事態に問題を感じたある教員が総合企画委員会で提案したことをきっかけにコミュニティコラボレーションセンターが設置され、当初考えていた以上に広がりを見せている。現在も、大学の正面に近い場所にセンターを置くなど、学生が参加しやすいよう、様々な点で工夫している。

こうした体験学習以外にも、「意欲を引き出し、意欲に応える」教育理念に基づき、留学制度、他学部・他学科開放科目、複数専攻制度、複数学位取得制度などに力を入れているし、今後も強化していく方針だという。資格取得もさらに増やしていきたいという。様々な努力が評価され、東海地区のとある大学満足度調査で1位をとった。「入ってよかった大学」と評価されてうれしいし、「出てなごうれしい大学」にしていきたいと学長は意気込む。



今後の課題は「地域に根差し、世界に開く」をどう実現させるか

愛知淑徳大学では、地域社会の人と学び、地域と連携するために、コミュニティコラボレーションセンターを通じて、学生のボランティアやインターンシップを展開しているし、2006年には「愛知淑徳大学クリニック」を設置した。地域でのアイデンティティを強化するために、その核となる活動を今後も育てていきたいという。対象となる領域は狭くてよいので、核となるものを、試行錯誤しながら探し、それを地域に広げることが今後の課題だという。世界に開くという点でいえば、短期・長期、ゼミなどの様々な形での海外での学びも自然に増加している傾向もあり、これにさらなる教育的なしかけを増やす予定だ。中国の天津外国語学院大学とのダブルディグリーも始まっており、一層の国際交流に意欲的に取り組む。

また、拡大した現在の規模にふさわしい改革を続ける組織運営の仕組みも考えて、実行に移していきたいとのことで、今後もその動向を見守っていきたい。

(両角亜希子 東京大学大学院 教育学研究科 大学経営・政策コース講師)